

学術情報流通基盤の担い手は誰か -Open Accessの時代を迎えて

UniBio Press
社団法人 日本動物学会
永井 裕子

学術誌を出版するための原資 (動物学会の場合)

日本学術振興会研究成果公開促進費(学術定期刊行物)の存在 平均1千万円
冊子体購読による収入 平均300万円
会員会費 約1千万円
その他?

- 学会にとって、補助金は大きな支え！
補助金で冊子、J-STAGEで電子ジャーナル、学術情報である限り、それで良いということなのだろうか

電子ジャーナルの時代はやはりやって来た 学会の対応 1

商業出版社へ販売を委託
世界に向けて知られることが第一目的
大型電子ジャーナルパッケージの中で
どのような存在感があるのか？
J-STAGEの日本特有のあり方
学協会が電子ジャーナルを出版しているのは確かであるが、プラットフォームとしての膨大な維持費は常に国が持ち続ける。

電子ジャーナル時代はやはりやって来た 学会の対応 2

- 電子ジャーナルはすでに生き物であり、我々の想像を越えて、変容し続けるだろう。
- 二次情報データベースの重要性も、アクセスログ解析の登場も電子ジャーナルによってもたらされ、それがまた学術情報そのもの、流通のあり方そのものも変革してしまった。

学会は、この趨勢に追いついているか？

欧米でのOpen Access運動は??

- 欧米SPARCのあまりにすばやい変身
商業出版社への対抗に疲れた？
究極の選択肢としてあるのか？

税金により行われる研究は、税金を払うすべての人間のものであり、購読料を支払って新たな知見を得るのは、納税者が二重払いを常にし続けることになる。

Open Accessは研究者の側が出版費を負担するビジネスモデル

- 研究者の研究費にうわのせ
1投稿につき15万円～30万円

学術情報という名においてはこれ以上耳に心地よい言葉はない「学術情報はみんなのものだ」

UniBio Press平成15年度参画誌 日本ではじめての自主的パッケージ

日本哺乳類学会

Mammal Study

日本哺乳類卵子学会

Journal of Mammalian Ova Research

(社)日本動物学会

Zoological Science

UniBio Press 活動報告

- 平成15年11月5日第5回図書館総合展フォーラム参加
- 11月20日国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォース提案 東京大学
- 平成16年3月5日私立大学東西役員会
市ヶ谷アルカディア
- 3月11日生物系セミナー - 東京大学
- 7月1日国立大学図書館協議会総会
大阪大学

2004年度契約図書館

- 北海道大学、東北大学、新潟大学、千葉大学、東京大学、大阪教育大学、京都大学、鹿児島大学

今後順次交渉予定

名古屋大学、大阪大学、九州大学、滋賀医科大学、広島大学、東邦大学、北里大学、日本大学、海外図書館！

学術流通整備基盤事業とは

学会誌のあり方を問うことにより、最終的には、

- 日本の学会は今後どうありたいかを問われることとなったのではないか。

生物系学協会のご参加をお待ち
しています

ご連絡は
社団法人日本動物学会
03-3814-5461
または国立情報学研究所コンテンツ課
03-4212-2361